

田原本町埋蔵文化財
調査年報

2002年度

12

2003

田原本町教育委員会

例　　言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が2002年度（平成14年度）に実施した発掘調査及び試掘調査・工事立会の略報である。発掘調査については、別途、その概要報告書を作成中である。
2. 発掘調査は、本文第2表にまとめたように受託事業については原団者に、国庫補助事業については土地所有者に多大なご理解とご協力を賜った。
3. 本文に記された遺構の記号については、SDが溝、SKが土坑または井戸、SRが河川、SBが建物を表す。
4. 遺物量は、幅34cm、奥行き54cm、深さ15cmのコンテナに収納した際の箱数である。
5. 本文で記載された弥生土器の時期は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』（木耳社）による。
6. 調査・遺物整理にあたっては、秋山浩三、石野博信、金関 惇、鎌柄俊夫、寺澤 薫、樋口隆康、松田真一、森 浩一諸氏より多大なご教授を賜った。記して感謝の意を表します。
7. 本文の執筆は、Ⅰ、Ⅲを藤田三郎が、Ⅱ、Ⅲの各調査は担当者である豆谷和之、清水琢哉、奥谷知日朗が執筆した。編集は藤田がおこなった。

目 次

I. 2002年度の調査概要	1
II. 発掘調査の概要	
(1) 唐古・鍵遺跡第87次調査.....	5
(2) 唐古・鍵遺跡第88次調査.....	6
Column 1 「弥生時代」の壺と「古墳時代」の壺.....	7
(3) 唐古・鍵遺跡第89次調査.....	8
Column 2 集落内部を区画した溝	9
(4) 唐古・鍵遺跡第90次調査.....	10
Column 3 環濠から出土した様々な木製品	11
(5) 唐古・鍵遺跡第91次調査.....	12
Column 4 環濠帯につくられた方形周溝墓	13
(6) 十六面・薬王寺遺跡第17次調査.....	14
(7) 十六面・薬王寺遺跡第18次調査.....	15
(8) 十六面・薬王寺遺跡第19次調査.....	16
(9) 十六面・薬王寺遺跡第20次調査.....	17
(10) 日光寺推定地第3次調査.....	18
Column 5 中世寺院下層の古墳時代集落	19
(11) 秦庄遺跡第3次調査.....	20
(12) 宮古北遺跡第13次調査.....	21
(13) 法貴寺遺跡第4次調査.....	22
Column 6 中世から近世の屋敷跡	23
(14) 法貴寺斎宮前遺跡第5次調査.....	24
(15) 千代遺跡第4次調査.....	25
(16) 多遺跡第21次調査.....	26
(17) 中ツ道第1次調査.....	27
(18) 寺内町遺跡第6次調査.....	28
Column 7 净照寺門前の調査	29
(19) 西代遺跡第1次調査.....	30
III. 試掘調査・工事立会の概要.....	31
(1) 羽子田遺跡 試掘調査1(S-200201)	32
(2) 羽子田遺跡 試掘調査2(S-200202)	33

I. 2002年度の調査概要

本町が実施した2002年度（平成14年度）の発掘調査は、19件である。昨年度が15件であり、やや増加傾向がみられるが、これは個人住宅の原因によるものである。

この個人住宅の新築に伴う調査は、地震対策のため鋼管杭や湿式パイプなどが地中深く打ち込まれることが原因である。しかしながら、面積的には小規模であり、数日で終了した短期の調査となっている。ここ数年の傾向は、1件程度の1,000m²を越える大規模なものと200～500m²ほどの中規模、半数以上を占める50m²以下の小規模なものに分けることができる。

さて、本年度19件の調査の内訳は、公共事業に伴うもの5件、民間開発に伴うもの2件（うち重要遺跡認定に基づく調査1件）、唐古・鍵遺跡の範囲（内容）確認調査1件、個人住宅等建築に伴う調査11件である。このうち、唐古・鍵遺跡の調査が5件あり、本町の主要な発掘調査となっている。例年のとおり唐古・鍵遺跡の遺物量は膨大であり、全容については把握しえないが、概要をまとめておく。本年度の成果は、弥生時代から近世まであり、時期別に述べる。

弥生時代 弥生時代の調査としては、継続的に発掘調査が実施されている唐古・鍵遺跡の調査がある。調査の原因は、遺跡の内容確認と緊急調査があるが、いずれの調査においても弥生集落の構造を把握する上で重要な成果があった。唐古・鍵遺跡の調査は5件で、環濠を含む外縁部3件と居住区2件の調査である。

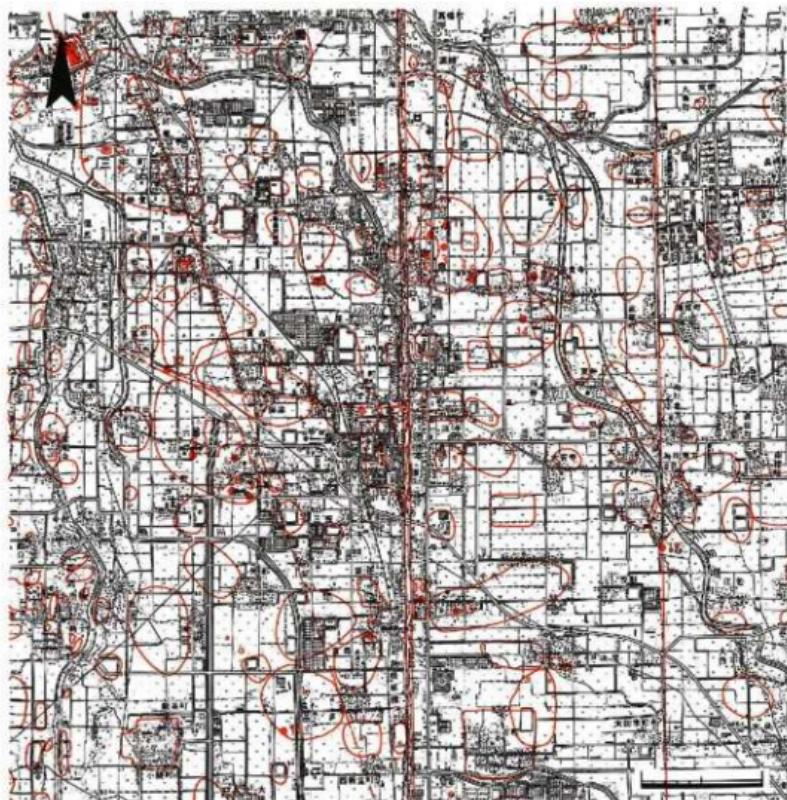
外縁部の調査は、第87次・第90次・第91次である。第87次調査は小規模であったが、北端部で弥生時代前期の南方砂層と中期の北方砂層と推定される砂層堆積を確認し、これまでの調査成果を追認することになった。また、第90次調査ではムラの北西部を、第91次調査では南東部を巡る環濠を検出した。いずれも中期から後期を経て古墳時代前期に再掘削される環濠を含んでいる。これらの調査で検出した環濠は、これまで確認してきた環濠の延長にあたるものも多く、環濠の推定ラインを確実にすることとなった。第91次調査では、唐古・鍵遺跡では数少ない1,000m²を超える大規模な調査であった。この調査で注目されるのは、中期初頭（大和第II-3様式）の方形周溝墓を3基検出したことである。唐古・鍵ムラの中期中頃の大環濠が整備される以前の様相が明らかになった。すなわち、居住区である微高地の縁辺に小規模な墓域をもっていることを確認し、前期に形成された3地区の微高地の縁辺に墓域が伴う可能性がでてきた。

居住区の調査は、第88次・第89次である。第88次調査では、弥生時代前期の木器貯蔵穴や中期初頭と古墳時代前期の井戸を検出しておき、西地区的居住区の様相が明らかになった。第89次調査は、集落北西部の居住区の調査で、井戸や区画溝を確認した。最も注目されるのは、大型建物の柱穴を検出したことである。昨年度においてその一部を検出し、今年度にその全体像を確認する目的で調査をおこなった。その結果、東北-西南方向に軸をもつ大型建物であることを確認したが、調査区外に拡がることが判明し、15年度に調査を持ち越すこととなった。

古墳時代 古墳時代の集落遺構として、中世寺院の日光寺推定地において5世紀後半の溝を検出した。小規模な調査であったが、古墳時代前期から後期にかけての集落遺構が重複して存在していることが判明した。また、秦庄遺跡においても古墳時代前期の溝を確認し、本時期の集落域がさらに拡がる可能性ができた。いずれも盆地中央部における集落遺跡として、今後その性格を明らかにしていく必要があろう。

第1表 田原本町における埋蔵文化財発掘届及び通知一覧表

	発掘届 57条の2	発掘通知 57条の3		発掘調査	工事立会	計
2002年度 (平成14年度)	25 (変更願い4)	11	通知内容	20	20	40
			実施分	町21(うち試掘2) 県1	17	39



田原本町の遺跡と調査地点

第2表 2002年度 発掘調査一覧表

	遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時期	調査担当	備考
1	唐古・鍵	第87次	田原本町唐古96	藤本滋子	個人住宅の建築	2002. 4. 22 ~ 4. 24	8 m ²	弥生	豆谷和之 奥谷知日朗	国庫補助事業
2	唐古・鍵	第88次	田原本町龍305 北側道路	田原本町	下水道管の埋設	2002. 7. 1 ~ 7. 24	51.23 m ²	弥生・中世	豆谷 奥谷	下水道課
3	唐古・鍵	第89次	田原本町唐古121-1	田原本町	内容確認	2002. 7. 30 ~ 12. 11	500 m ²	弥生	豆谷 奥谷	国庫補助事業
4	唐古・鍵	第90次	田原本町唐古62-1	北野勇裕	事務所の建築	2002. 9. 11 ~ 10. 29	70 m ²	弥生・古墳	清水隊員	国庫補助事業 (主要遺跡対応)
5	唐古・鍵	第91次	田原本町龍155	田原本町	小学校校舎の建築	2002. 12. 2 ~ 3. 31	1,433 m ²	弥生・古墳	豆谷 奥谷	教育総務課
6	十六面・ 薬王寺	第17次	田原本町十六面 266-1, 266-5	平井 貢	個人住宅の建築	2002. 7. 19 ~ 7. 23	20 m ²	古墳・古代 中世・近世	清水	国庫補助事業
7	十六面・ 薬王寺	第18次	田原本町薬王寺525	吉村典久	個人住宅の建築	2002. 8. 8 ~ 8. 22	39 m ²	古墳・中世	清水	国庫補助事業
8	十六面・ 薬王寺	第19次	田原本町薬王寺 368-2	守田 誠	個人住宅の建築	2002. 11. 11 ~ 11. 12	7 m ²	古墳・中世	清水	国庫補助事業
9	十六面・ 薬王寺	第20次	田原本町薬王寺 344-1	寺方聰一	住宅診療所の建築	2002. 12. 16 ~ 12. 20	33 m ²	弥生・中世	清水	国庫補助事業
10	日光寺推定地	第3次	田原本町千代320-2	坂本誠司	個人住宅の建築	2002. 8. 5 ~ 8. 7	15 m ²	古墳・中世	清水	国庫補助事業
11	春庄	第3次	田原本町岩森278-2	福西久彦	個人住宅の建築	2003. 1. 14 ~ 1. 15	7 m ²	古墳・近世	清水	国庫補助事業
12	宮古北	第13次	田原本町宮古172-1 北側道路	田原本町	道路の改修	2002. 10. 18 ~ 10. 31	180 m ²	弥生・古墳	豆谷 奥谷	建設課
13	法貴寺	第4次	田原本町法貴寺1550 - 1552 - 1553合併	松山進一郎	個人住宅の建築	2002. 5. 22 ~ 7. 2	182 m ²	中世・近世	清水	国庫補助事業
14	法貴寺薬王 前	第5次	田原本町法貴寺1756 後醍醐水路	田原本町	水路の改修	2002. 11. 18 ~ 12. 26	303 m ²	中世・近世	産業振興課	
15	千代	第4次	田原本町千代1191-2	戸田 大	個人住宅の建築	2002. 10. 3	2 m ²	中世	豆谷	国庫補助事業
16	多	第21次	田原本町多608 西側水路	田原本町	水路の改修	2003. 2. 14 ~ 2. 21	87 m ²	中世・近世	清水	産業振興課
17	中ツ通	第1次	田原本町立業 555, 559-1	森田力夫	個人住宅の建築	2002. 5. 27 ~ 5. 29	14 m ²	中世	豆谷 奥谷	国庫補助事業
18	寺内町	第6次	田原本町616	浜岡秀逸	個人住宅の建築	2002. 10. 15 ~ 10. 18	16 m ²	中世・近世	豆谷	国庫補助事業
19	西代	第1次	田原本町西代79-1	山辺広行 政事審議会	防火水槽の設置	2002. 10. 8 ~ 10. 9	21 m ²	近世	奥谷	受託事業

古代～近世 古代の遺跡の調査はないが、羽子田遺跡の試掘調査では、須恵器の一部の装飾と思われる水鳥の精巧な頭部が出土した。綠釉陶器片も出土しており、周辺地域に本時期の遺跡が存在する可能性がでてきた。

中世の調査では、唐古・鍵遺跡第88次調査、千代遺跡第3次調査、法貴寺遺跡第4次調査がある。唐古・鍵遺跡第88次調査は、「唐古南」氏の居館推定地であり、それに関係する大溝や井戸を検出した。法貴寺遺跡第4次調査では、室町時代の大溝を確認し、中世法貴寺氏の関連を考える重要な調査となった。

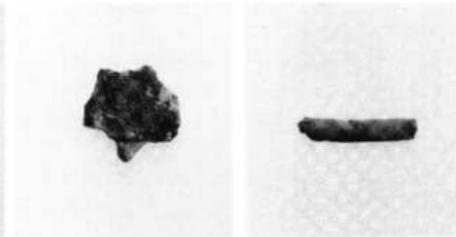
近世の調査では、寺内町遺跡第6次調査がある。寺内町遺跡の調査としては、初めて教行寺(淨照寺)の門前にあたる部分を調査した。小規模であったが、近世の整地土を確認し、中世から近世への寺内町形成をとらえることができた。



唐古・鍵遺跡の航空写真と調査位置（平成14年度分）



銅鐘（第89次調査）



銅鐘（第89次調査）



銅劍（第90次調査）



ヒスイ製勾玉（第91次調査）

II. 発掘調査の概要

(1) 唐古・鍵遺跡 第87次調査

所在地 田原本町大字唐古小字ソ子田96

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2002.4.22~4.24

調査面積 約 8 m²

担当者 豆谷和之・奥谷知日朗

遺物量 1箱

位置・環境 唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落である。その占有面積は約30万m²に達する。

今回の調査地は遺跡範囲の北西端にあたり、周辺部では過去に第12・18次の2件の調査が行われている。これらの調査から本調査地では、弥生時代中期後半の河川（第1次調査における北方砂層）の検出が予想された。

検出遺構 弥生時代中期前半：河川1条

弥生時代中期後半：河川1条

中世：落ち込み1

調査区は、2m×2mのトレンチ2カ所を南北に、2mの間隔で設定した。北を第1トレンチ、南を第2トレンチとする。

弥生時代中期前半の河川は、調査区全域に広がる。砂や粘土、シルトの互層堆積である。弥生時代中期後半の河川は、第2トレンチの南半で北肩のみを検出した。粗砂で埋没する。

出土遺物 弥生時代中期前半の河川の最上層で、広口長頸壺が出土した。弥生時代中期後半の河川からは、弥生時代中期の土器が出土するが大半が摩耗している。そのなかで、弥生時代中期後半の壺は、口縁部から底部まで揃い、摩耗も少ない。

まとめ 今回の調査では、当初の予想通り、第1次調査の北方砂層に対応すると考えられる弥生時代中期後半の粗砂層を検出した。また、この粗砂層が切り込んだ堆積自体も河川堆積層と考えられ、唐古池北西部に弥生時代中期後半以前の谷地形が想定される。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第2トレンチ全景 (南から)



3. 河川内・壺出土状況 (大和第II様式)

(2) 唐古・鍵遺跡 第88次調査

調査地 田原本町大字鍵小字堀内305北側道路
調査目的 下水道管の埋設
調査期間 2002.7.1~7.24

調査面積 51.23m²
担当者 豆谷和之・奥谷知日期
遺物量 15箱

位置・環境 今回の調査地は、唐古・鍵遺跡の西地区にあたり、周辺においては北隣接地で第82次調査、南隣接地で第14次調査が行われている。調査は、鍵集落北側の東西道路に下水道管を埋設する工事に伴うものであり、遺跡西地区の東西にトレンチを入れる結果となった。

検出遺構
弥生時代前期：土坑5基
弥生時代中期：土坑5基、小溝1条
弥生時代後期：土坑2基
古墳時代初頭：土坑1基
古墳時代後期：古墳周濠1条
中世：井戸1基、大溝3条、素掘小溝3条

弥生時代前期の土坑5基は、いずれも木器貯蔵穴と考えられる。中世の大溝3条のうち、南北の1条は第46次調査で検出した大溝に連なる。この南北大溝から西に派生した東西大溝1条は、現鍵集落北側の東西道路と平行している。

出土遺物 弥生時代中期初頭の井戸から、ほぼ完形の壺（中世井戸の掘削によって底部を欠失）が出土した。胎土と形態、構成部は、在地のものとは異なり、搬入品と考えられる。古墳時代前期の井戸からは、弥生系壺と布留形壺の完形品が出土している。現鍵集落北側の東西道路と平行して検出した東西中世大溝の上層からは、朝鮮陶磁片が出土している。

まとめ 今回の調査は、下水管の埋設に伴う幅狭いものであったが、弥生時代前期から中世までの唐古・鍵遺跡西半部における土地利用状況の一端を明らかにした。



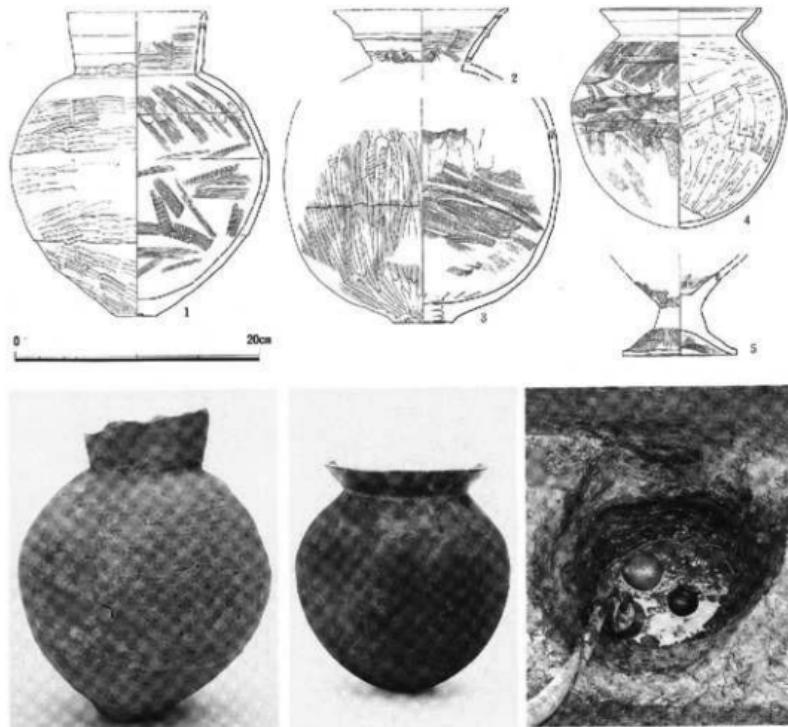
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 古墳井戸・中世大溝完掘状況(東から)



3. 井戸・壺出土状況(大和第II様式)



「弥生時代」の壺と「古墳時代」の甕

唐古・鍵遺跡第88次調査は、鍵集落北側東西道路における下水道埋設工事に伴う発掘調査であり、調査区は約40mと長いが、幅は1m弱と狭い。結果的に、唐古・鍵遺跡の西地区において、東から西へ細長いトレンチをいたれた形となった。調査規模は小さいものの、いくつかの成果を得た。古墳時代初頭の土坑もそのひとつである。調査区の中央付近で、古墳時代初頭の土坑を1基検出した。この土坑は、平面が径約0.8mの不整円形で、深さは約0.9mの断面円筒形を呈する。底面は砂層に達し、井戸と考えられる。下層において、完形の弥生系壺(1)と布留形甕(4)が共伴した。古墳時代初頭の奈良盆地における新旧器種の使用状況を考えるうえで良好な資料といえよう。その他、二重口縁甕(2)・被籠痕甕(3)は最下層、高坏(5)は中層からの出土である。

Column

1

唐古・鍵遺跡
第88次

(3) 唐古・鍵遺跡 第89次調査

所在地 田原本町大字唐古小字ソ子田121-1

調査原因 範囲確認

調査期間 2002.7.30~12.11

調査面積 500m²

担当者 豆谷和之・奥谷知日朗

遺物量 179箱

位置・環境 今回の調査地は、昨年度に実施した範囲確認の第84次調査地と一部重複した東隣接地である。第84次調査の東排水溝で大型建物に伴うと推定される大型柱根を検出したため、その全容の確認を目的とした。

検出遺構

- 弥生時代前期：土坑3基、落ち込み1
- 弥生時代中期：大型建物1棟、土坑2基、溝2条、小溝3条
- 弥生時代後期：土坑3基、溝1条
- 弥生時代時期不詳：土坑10基

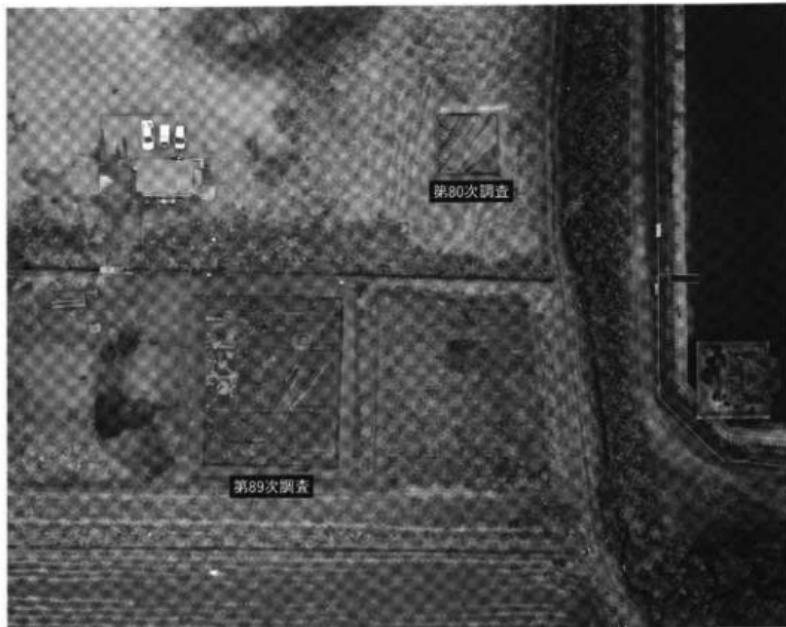
今回の調査により大型建物は、南西-北東方向に軸をもつ独立棟持柱付建物であることが判明したが、北東側は調査区外に拡がっている。柱根の太さは、最大直径80cmを測る。

また、この大型建物の東側にあってほぼ平行する溝は、第80次調査において大形勾玉を収納した褐鉄鉢容器が出上した溝へと連なる。この溝を境として、地形的には東側が落ち込んでおり、区画溝としての性格が強い。この溝は、本調査地の南半において、西側へは直角に分岐し、第84次調査地ではその延長の溝を確認している。

出土遺物 大型建物の柱穴列上面には、弥生時代後期後半～布留式の遺物包含層が堆積する。この包含層の中には、銅鏡1点が含まれていた。

まとめ 唐古・鍵遺跡では、第74次調査に次いで2例目の大型建物の検出となった。建物はさらに北側へと延びるため、桁行は不明である。梁間は約6mと考えられる。弥生時代中期後半の遺構面で、柱根腐食痕を検出しているが、柱穴掘り方は検出できていない。のことから、大型建物は弥生時代中期前半以前に渾る可能性がある。





集落内部を区画した溝

近年の唐古・鍵遺跡の発掘調査では、集落内部を区画する溝の実態が明らかになりつつある。今回の第89次調査では、調査区の対角線上となる北東-南西方向で大溝（SD-1114）を検出した。大溝は上面の検出幅が約4.0mであるが、これは溝幅2.0m、深さ約1.0m程度の溝が再掘削により重複した結果である。

出土土器からは、弥生時代中期中頃に溝が掘削され、大きくは中期後半と後期初頭、後期後半に再掘削されたことが想定される。本調査区の北東約20mで行った第80次調査では、第89次調査と同様な時期・方向の溝群を検出し、ヒスイ勾玉を2点入れた褐鉄鉢容器が出土した。時期・方向・位置関係から、第80次調査と第89次調査の溝群は、一連のものと考えられる。その総延長は約60mに達する。

この大溝を境として、東側は弥生時代前期の落ち込みがあり、西側は微高地であったと考えられる。微高地には南東-北西方向にのびる溝1条と小溝2条があり、大溝の西肩にはほぼ直角に取り付く。また、西側微高地では大溝と桁方向が平行する大型建物を検出している。大溝（SD-1114）は、周囲の構造物を規定した区画溝の可能性がある。

Column

2

唐古・鍵遺跡
第89次

(4) 唐古・鍵遺跡 第90次調査

所在地 田原本町大字鍵小字城ノ前62-1

調査原因 事務所建築

調査期間 2002.9.11~10.29

調査面積 70m²

担当者 清水琢哉

遺物量 80箱

位置・環境 今回の調査地は、唐古・鍵遺跡の北西部に位置する。周囲では第13次・85次調査を実施しており、本調査地はその成果から集落の北西を跨む環濠帯にあたり、大溝が1~2条検出されることが予想された。

検出遺構 弥生時代中期：環濠1条

弥生時代後期：環濠2条（再掘削1）、
小溝1条

古墳時代前期：大溝1条（再掘削）

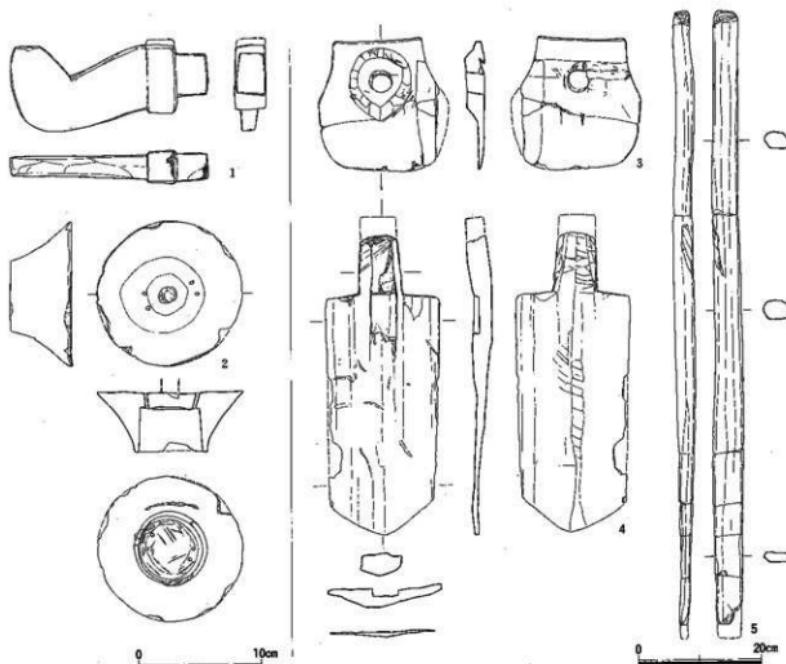
中世：素掘小溝群

弥生時代中期の北東～南西方向の環濠SD-103は、幅5m、深さ1.5mを測る。弥生時代後期の環濠2条は、中期の環濠とは位置を変えて掘削している。方向は中期と同じ北東～南西方向である。調査区東端のSD-102は一部を検出したのみで詳細不明である。調査区中央付近で検出したSD-101Cは、幅7m、深さ1.6mを測る。大和第V様式に掘削し、大和第VI様式後半に再掘削する。そして、古墳時代前期（庄内式新段階）に再掘削している。

出土遺物 弥生時代中期のSD-103からは、大和第III様式後半の土器やイノシシ頭骨などが出土した。弥生時代後期のSD-101からは、大和第V様式の土器や鐵・用途不明木製品などが出土した。古墳時代前期の溝からは、吉備の甕などを含む庄内式新段階の古式土器が出土した。

まとめ 今回の調査で、本調査地が環濠帯の一画であることを追認した。後期の環濠SD-101Cは、古墳時代前期まで再掘削を行い維持していることから、第13次調査のSD-05に繋がると推定される。





環濠から出土した様々な木製品

唐古・鍵遺跡は、木器や石器など各種製品を製作する拠点集落である。特に木製品は、弥生時代前期から後期にかけて、製作途中のものやそれらを貯木しておく遺構が多数検出されている。弥生時代中・後期には、貯木する専用の穴は掘らず、環濠に貯木するが多くなる。今回の調査でも後期の環濠であるSD-101Cから、着柄鋤と柄の未成品(4・5)がセットで出土した。本地の周辺で木製品の製作が行われていた可能性がある。

この環濠からは、鋤の未成品のほか、様々な木製品が出土している。1は、絵画土器の建物にみられる渦巻き状の棟篠りに似たもので、建物篠りの一部であろう。2は用途不明品であるが、直径8cmの棒状のものが差し込むソケット状になっているもので、上部の中心には1.5cmの軸を作り出している。また、上部には2孔一対の小孔があけられており、轆轤挽きによるツメ痕あるいは結合に用いられたものと推定される。3は平鋤で、舟形突起の反対側の面に泥除装着用の溝を設けている。

Column ③

唐古・鍵遺跡
第90次

からこ かぎ (5) 唐古・鍵遺跡 第91次調査

所在地 田原本町大字鍵小字中溝田155
調査原因 小学校校舎の建築
調査期間 2002.12.2~2003.3.31

調査面積 1,433m²
担当者 豊谷和之・奥谷知日朗
遺物量 381箱

位置・環境 今回の調査地は、唐古・鍵遺跡の南東端にあたる。周辺は幼稚園と小学校の敷地であり、校舎等の改修に伴い、多くの調査が行われている。これらの調査により、本調査地は環濠と河川が合流する部分であると予想された。

検出遺構 工事は、北小学校の北校舎および調理室の建て替えに伴うものである。北校舎予定地を第1調査区、調理室予定地を第2調査区とした。

第1調査区

弥生時代中期前半：

環濠2条、土器棺1基、

方形周溝墓3基

弥生時代中期後半～後期初頭：

環濠（再掘削）2条、溝2条、

土坑1基、河川1条

弥生時代後期後半～古墳時代初頭：

環濠（再掘削）2条、

溝（再掘削）1条、土坑6基

第2調査区

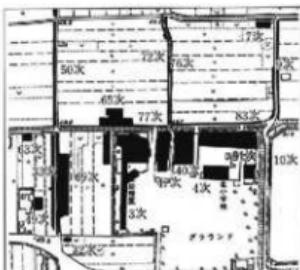
弥生時代前期：溝1条、土坑5基

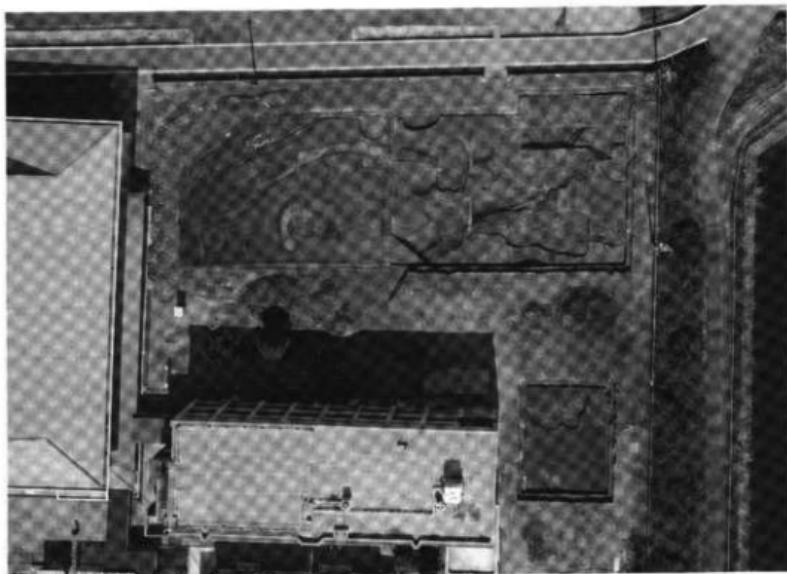
弥生時代中期：溝2条

古墳時代初頭：溝1条、土坑3基

出土遺物 環濠2条のうち、西端で検出した集落側のSD-101からは、多量の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土した。弥生時代中期の遺物量は少ないが、環濠下層から一本釘や組合釘が、方形周溝墓から供獻土器や木器が出土した。その他、ヒスイ勾玉が出土している。

まとめ 唐古・鍵遺跡の南東端では、弥生時代中期前半に環濠2条が掘削され、その環濠間に方形周溝墓が築造されていることが明らかとなった。





環濠帯につくられた方形周溝墓

唐古・鍵遺跡は、奈良盆地の大規模拠点集落でありながら、その墓域については不明な点が多い。これまでには、唐古・鍵遺跡より0.5~1kmちかく離れて検出された方形周溝墓群を、「墓域の可能性あり」として扱ってきた。

今回、唐古・鍵遺跡第91次調査では予期せず、環濠と環濠の間、約20mの空間で、環濠と軸をあわせて並んだ弥生時代中期前半の方形周溝墓3基を検出した。3基の方形周溝墓のうち全形がわかるものは、調査区中央で検出したST-201である。

ST-201は、墳長が長軸13m、短軸9mで、周囲に幅3m、深さ1.1mの溝が巡る。墳丘高は、削平のため不明。その東側にST-202が並ぶが、墳丘の北側2/3は調査区外のため、全形は不明。周囲には、幅2~3m、深さ0.8mの溝が巡る。このうちST-201の周溝からは、流水文を施した広口壺や木製高壺などの供獻遺物、一木鋤や組合鋤などの土木具が出土した。

Column

4

唐古・鍵遺跡
第91次

(6) 十六面・薬王寺遺跡 第17次調査

所在地 田原本町大字十六面小字南側266-1他
調査原因 個人住宅の建築
調査期間 2002.7.19～2002.7.23

調査面積 20m²
担当者 清水琢哉
遺物量 4箱

位置・環境 十六面・薬王寺遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。第1次調査で中世居館遺構が検出されて以来、現在までに16次に及ぶ調査を実施している。遺跡の面積は極めて大きいが、これは遺跡中央北に中世居館跡、遺跡東部に古墳時代初頭の墓域が存在しており、時期と性格を異にする複合遺跡である。

今回の調査は、遺跡西部の十六面集落内での調査である。

検出遺構 古墳時代：落ち込み1

古代：溝1条、落ち込み1
中世：土坑1基、落ち込み1
近世：井戸4基、土坑4基

古墳時代の包含層は層序の確認のみで調査を行っていない。古代の落ち込みは、粗砂で覆われた状態で検出した。畦畔状の高まりが一部みられるが性格は明らかでない。

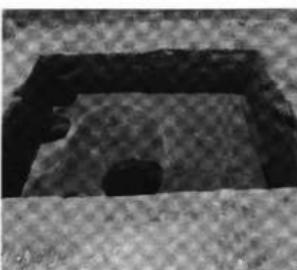
江戸時代の井戸が、20m²という調査範囲にもかかわらず4基検出された。直径1m前後、深さは1基で確認できたのみだが2.2mを測る。

出土遺物 須恵器・土師器・近世陶磁器

まとめ 調査の結果、本調査地が近世には集落として井戸が多数掘削される立地であったことが判明した。十六面村は、保津・竹田(西竹田)・薬王寺から分村したと伝えられる。元禄17年(1704)の保津村絵図の添え書きに寛永17年(1640)に保津村から分かれたとあるが、今回検出した遺構には17世紀代となる可能性のある井戸も1基含まれております。十六面村の成立が文献史料通り17世紀中頃となる可能性がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景・近景(東から)



3. 調査地全景・古代(北から)

(7) 十六面・薬王寺遺跡 第18次調査

所 在 地 田原本町大字薬王寺小字北垣内525 調査面積 39m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 2002.8.8~8.22 遺物量 4箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡中央部に位置する。薬王寺集落の北端にあたり、本地南側40mには樹齢500年の樟の巨樹がそびえる八幡神社が鎮座する。

調査地は、既存建物の基礎が深さ0.9mまであったため、この解体工事で中世遺構面が大幅に削平されていた。

検出遺構 弥生時代末~古墳時代：河川1条
古墳時代：落ち込み1、溝1条、柱穴4基
中世：井戸2基、土坑2基
古墳時代の遺構は、調査区のほぼ全体を覆う落ち込み状の遺構、この落ち込みの下で検出される小溝1条と柱穴である。遺構の性格は明らかでない。

中世の井戸2基は断面袋状であるが、これは掘削された基盤層が弥生時代末頃の軟弱な河川堆積のため、崩壊したと考えられる。

出土遺物 落ち込みから古式土師器が出土した。中世の井戸からは土師質羽釜や瓦質擂鉢等が出土した。

まとめ 調査の結果、古墳時代と中世の遺構を検出した。中世の遺構は、削平により井戸などの深い遺構のみが残る。薬王寺環濠集落内という立地を考えれば、本来多くの遺構が存在した可能性が高い。

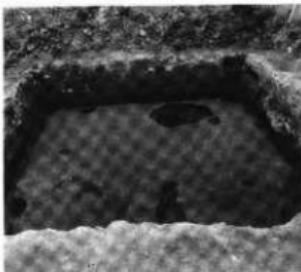
調査区全体に古墳時代前期頃の落ち込みが拡がっていた。この落ち込みの埋土となる黒褐色粘質土層は調査区の北西50mで行った立会調査でも確認しており、広範囲に拡がる落ち込みであることが推測される。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景・近世 (西から)



3. 調査地全景・古墳時代 (東から)

(8) 十六面・薬王寺遺跡 第19次調査

所在地 田原本町大字薬王寺小字金ヶ坪368-2
調査原因 個人住宅の建築
調査期間 2002.11.11~11.12

調査面積 7 m²
担当者 清水琢哉
遺物量 1箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡中央部に位置する。過去の宅地開発により厚さ約1.7mの造成が行われているため、面的な調査は困難であった。そのため、遺構の有無を確認する程度の小規模な調査となった。

北西50mで行われた第6次調査では、布留期の方形周溝墓を検出している。また、東側100mで行われた第11次調査では、庄内期頃の円形周溝墓1基を検出している。この円形周溝墓の西側には弥生時代末頃の河川があり、ここからは銅鏡や完形土器群が出土している。

これらのことから、本調査地でも何らかの弥生時代末～古墳時代前期の遺構が拡がる可能性が考えられた。

検出遺構 古墳時代：落ち込み1
中世：素掘小溝群
中世素掘小溝は東西方向で、幅0.3m、深さ0.1m程度のものを3条検出している。

出土遺物 落ち込みからは古式土器が出土した。その直上の包含層からは埴輪を含む古墳時代中期の土器が出土した。

まとめ 調査の結果、本調査地点にも弥生時代末～古墳時代前期頃の遺構が拡がることが確認できた。ただし、調査面積が狭小であつたことから、遺構の面的な把握ができず、その性格を把握できなかった。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 西壁堆積状況 (東から)

(9) 十六面・薬王寺遺跡 第20次調査

所在地 田原本町大字薬王寺小字井坪344-1 調査面積 33m²
調査原因 個人住宅の建築 担当者 清水琢哉
調査期間 2002.12.16~12.20 遺物量 1箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡南東端に位置する。本調査地の北側20mで行った第11次調査では、弥生時代末頃の円形周溝墓1基、河跡などを検出している。

今回の調査地は、平成9年度に青空駐車場造成工事として届出のあった場所の再開発である。この造成工事の前に試掘調査をおこなっており、5カ所の試掘坑ではそれぞれ弥生時代末~古墳時代初頭の遺物を含む堆積層を確認している。第11次調査で検出した河川と一連の遺構が敷地全体に拡がることが推測された。

検出遺構 弥生時代末~古墳時代前期：

溝1条、落ち込み1
中世：素掘小溝群

調査区のほぼ全体が弥生時代末頃の河川？の可能性があり、落ち込み状の遺構となっていた。

出土遺物 弥生時代末頃の溝からは、弥生土器が出土した。河川？（落ち込み）上面には網片となった弥生時代末頃の土器片が散布する。1点のみ半完形で小形壺が出土している。河川？（落ち込み）の中～下層には少量の土器片を含むが、詳細な時期は明らかでない。

まとめ 調査の結果、調査区全体が弥生時代の河川？（落ち込み）内であることが判明した。また、調査地北邊で検出した溝状遺構は弥生時代末頃の遺構であるが、本地の北側40mでの発掘調査で当該期の河川を検出しており、今回検出した溝との関連が考えられる。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. 小形壺出土状況

(10) 日光寺推定地 第3次調査

所在地 田原本町大字千代小字日光寺320-2 調査面積 15m²
調査原因 個人住宅の建築 担当者 清水琢哉
調査期間 2002.8.5~8.7 遺物量 3箱

位置・環境 日光寺推定地は、標高48m前後の沖積地に立地する。遺跡では、第1次調査で古墳時代後期の溝や中世の建物跡などを検出している。特に中世の建物跡は瓦葺きであった可能性があり、付近の字名に残る「日光寺」に関わる寺院関連の遺構と考えられた。

今回の調査地は、第1次調査地の南側150mに位置する。小字「日光寺」内での調査であり、寺院関連遺構の検出が考えられた。

検出遺構 古墳時代前期：土坑3基、溝2条

古代～中世：建物跡1棟

中世：素掘小溝群

古墳時代の溝は、1条が北北西～南南東方向、1条がほぼ南北方向である。

詳細な時期は不明だが、中世素掘小溝に切られる形で礎石建物一棟を検出した。小規模な面積のため、規模については不明であり、建物の性格については今後の課題である。

出土遺物 古墳時代前期末～中期の遺構から、土師器が多数出土した。

まとめ 調査の結果、本調査地には古墳時代前期～中期の遺構が分布することが明らかとなった。検出した溝等の性格は明確でないが、遺構の規模や遺物の出土状況などから、集落関連の遺構と考えられる。この時期の集落は本遺跡では初の検出であり、その拡がりについて今後解明する必要がある。



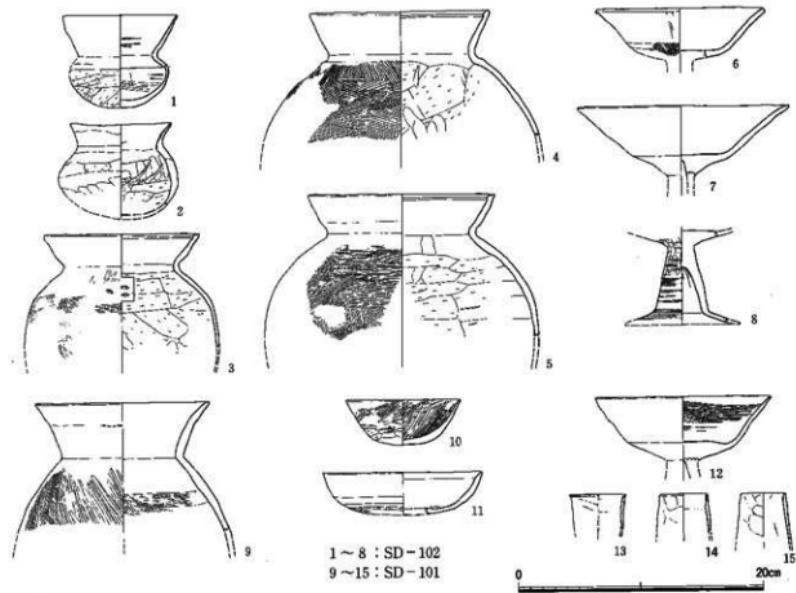
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. SD-101完掘状況 (東から)



中世寺院下層の古墳時代集落

中世寺院の日光寺推定地において、新たに古墳時代の集落遺構を確認した。今回の調査では、古墳時代前期（庄内式新段階）から中期（5世紀後半）の遺物が小規模な面積ながらまとまって出土した。最も多く遺物が出土したのは、南南東から北北西方向に走行する布留3式の溝SD-102である。おそらく集落内の区画溝になる可能性がある。また、5世紀後半の溝からは、製塙土器（13～15）も出土している。

本地の北150mで実施された千代遺跡第1次調査（現在の日光寺推定地）では、6世紀代の遺構遺物を確認しており、長期に亘って継続していた可能性がある。今後、奈良盆地中央部の古墳時代集落のひとつとして、注目できるであろう。

Column ◆ 5

日光寺推定地
第3次

(11) 秦庄遺跡 第3次調査

所在地 田原本町大字宮森小字南垣内278-2 調査面積 7 m²
調査原因 個人住宅の建築 担当者 清水琢哉
調査期間 2003.1.14~1.15 遺物量 3箱

位置・環境 秦庄遺跡は、標高53m前後の沖積地に立地する。南西には弥生時代～古墳時代の集落である多遺跡が並ぶ。また、秦庄遺跡と多遺跡の間を筋道が通っている。

この遺跡は、権原考古学研究所が奈良県立教育研究所の建築に伴い第1次調査を実施し、古墳時代後期の集落を検出している。

今回は、第1次調査地の北東150mでの調査である。遺跡の北東端にあたることから、遺跡の抜がりの有無が問題となった。

検出遺構 古墳時代：土坑？1基、溝1条

近世：土坑2基、小溝2条

東西3.5m、南北2mの調査区全体が古墳時代の東西方向の溝内であった。このため遺構の規模や性格を明らかにすることはできなかった。

出土遺物 古墳時代の溝からは、古墳時代前期末期（布留式3式）の土師器が多数出土した。

まとめ 調査の結果、遺跡北東端と考えていた本調査地は古墳時代前期末～中期頃の集落域である可能性が高くなった。第1次調査では、調査区の北東側で布留3式段階の遺物が多く出土したことから、この段階の集落が1次調査区北東側にあると推定している。今回検出した遺構は、第1次調査で推測されていた布留3式段階の集落の一部と推定される。

今回の遺構・遺物の分布状況は、遺跡周辺部の状況とは異なることから、古墳時代前期の集落は、調査区外にも抜がる可能性が高い。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 東壁堆積状況 (南西から)



3. SD-101土器出土状況 (布留期)

(12) 宮古北遺跡 第13次調査

所在地 田原本町大字宮古小字祭田172-1北側道路

調査原因 道路拡張工事

調査期間 2002.10.18~10.31

調査面積 180m²

担当者 豆谷和之・奥谷知日朗

遺物量 3箱

位置・環境 宮古北遺跡は、標高約46m前後の沖積地に立地する。13年度において、今回調査地の東側を保津・宮古遺跡第29次調査として実施し、調査地の西端に分布する遺構と遺物が、宮古北遺跡に関連するものと考えられた。この成果に基づき、宮古北遺跡の範囲が西南方向に拡大した。

検出遺構 弥生時代前期：土坑1基

古墳時代初頭：土坑1基、落ち込み1

古墳時代後期：落ち込み1

中世：素掘小溝6条

弥生時代前期の土坑は、深さ約0.7mを測る。排水溝内の検出であったため平面形及び規模は不明である。

古墳時代前期の遺構は、いずれも布留期とみられる。落ち込みは、幅約6mにわたり、弥生時代後期から古墳時代前期の土器小片が多量に散乱する状況であった。南北方向を軸にもつ浅い溝の可能性もある。以上の遺構は、調査区の西半中央にて、近接して検出された。

出土遺物 弥生土器、土師器、須恵器

まとめ 調査区東半で検出した古墳時代後期後半の落ち込みは、宮古北遺跡の範囲に含まれる。しかし、谷を挟んで調査区西半で検出した弥生時代前期の土坑や古墳時代初頭の落ち込みは、宮古北遺跡からは區別すべきであろう。西半の微高地は西調査区外へと高まっており、西に隣接する富本遺跡との関連が想定される。富本遺跡の範囲を、本調査地西半まで拡大させる必要がある。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (西から)



3. 調査地西半土坑完掘状況 (南東から)

(13) 法貴寺遺跡 第4次調査

所在地 田原本町大字法貴寺小字觀音寺1550他
調査原因 個人住宅の建築
調査期間 2002.5.22~7.2

調査面積 182m²
担当者 清水琢哉
遺物量 80箱

位置・環境 法貴寺遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。初瀬川付け替え工事に伴う第1次調査では室町時代の環濠をもつ屋敷地を検出し、中世集落の構造を知る上で良好な資料を提供した。

今回の調査は、初瀬川西岸で行った。付近の下水道工事に伴う立会調査により中世遺構が抜がることを確認しており、中世集落の構造を知る手掛かりが得られると予想された。

検出遺構

- 中世前半：河川1条、溝1条
- 中世後半：大溝1条、溝2条
- 中世末：溝1条、井戸1基、土坑2基
- 近世前半：小溝7条
- 近世後半：建物跡1棟、溝1条、土坑2基、柱穴、小土坑3基
- 近世末：建物跡1棟、溝4条、土坑3基
- 近代：建物跡、石垣、柱穴

屋敷地の区画となる溝は、調査地西半を流れる河川が埋没するのにあわせて徐々に西側へと移動する。近世に至って屋敷地の造成が行われ、幕末頃には造成が敷地全体に及ぶ。

出土遺物 室町時代の大溝から、多数の完形土師皿や陶器等が出土した。また、近世の遺構からも多量の瓦に混って陶磁器等が出土した。

まとめ 調査の結果、東側の屋敷地が徐々に西側に拡大していく過程が明らかとなった。

室町時代の大溝は規模も大きく、屋敷地を囲む環濠的な遺構となると考えられる。本地の東側190mに位置する第1次調査の屋敷地との関係は明らかでないが、本調査地の字名「觀音寺」との関連も含めて、室町期の法貴寺の集落構造を考える資料を提供した。



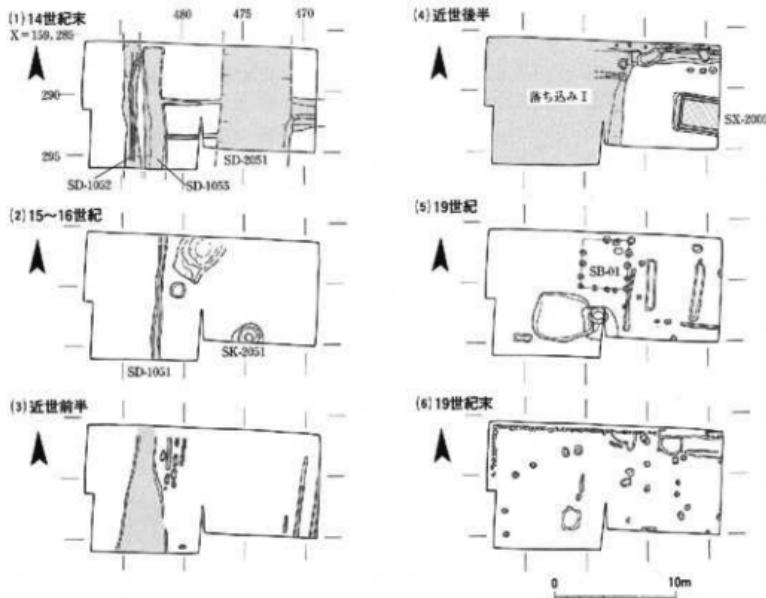
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第1トレンチ全景 (東から)



3. 第2トレンチ全景 (西から)



中世から近世の屋敷跡

法貴寺遺跡は、初瀬川を中心に分布する在地武士たちを束ねていた長谷川家の盟主である法貴寺氏の本貫地と推定されている。今回の調査地は、一辺30~50mほどの溝に囲まれた屋敷地や法貴寺子院が検出された第1次調査地の西190mにあたり、初瀬川と推定される砂層堆積と中世から近代まで連続と続く屋敷地の変遷を追うことができた。

調査地は、13世紀頃に埋没する河川内であったが、14世紀末頃には、調査地東半で屋敷地の西側を区画する南北方向の大溝SD-2051が掘削され、調査地東側が屋敷地となる(1)。15~16世紀にはこの大溝が埋没、その西側に区画溝SD-1051が掘削され、調査地東側2/3が屋敷地となる。瓦質枠の井戸SK-2051が掘削される(2)。近世前半頃、一時耕地となるが(3)、近世後半頃に調査地東半が屋敷地となり盛土造成される(4)。この造成地内のSX-2005は方形区画の溝で、性格は不明。造成地はその後西側へ拡張され、19世紀代にSB-01が建築された。蔽とみられる(5)。現在の屋敷は、明治初年に建築されたという。この段階には調査地全体が屋敷地化した。周囲の石組造構は、この時のものだろう(6)。

Column 6

法貴寺遺跡
第4次

(14) 法貴寺斎宮前遺跡 第5次調査

所在地 田原本町大字法貴寺小字斎宮前1756他東側水路
調査原因 農業用水路の改修
調査期間 2002.11.18~12.26

調査面積 303m²
担当者 清水琢哉
遺物量 11箱

位置・環境 法貴寺斎宮前遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。本遺跡内には斎宮寺が所在したが明治期に廃絶し、現在は斎宮神社が鎮座する。

本遺跡では、平成12年度から継続して農業用水路工事に伴う調査を行っている。その結果、現水路は江戸時代の農業用溜め池建設に伴って近世に整備されたことが明らかとなっている。また、中世末に遡る下層遺構、古代の河川を確認している。

検出遺構 中世：落ち込み1、溝1条、素掘小溝群
近世：溝1条

北北西-南南東方向の溝SD-01は、近世から現代まで維持されている水路である。幅不明、深さ0.6mを測る。北北西-南南東方向の溝SD-02は、中世頃の遺構と考えられる。幅不明、深さ0.8mを測る。

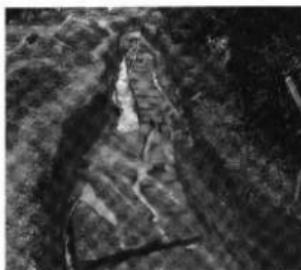
出土遺物 SD-01からは18~19世紀頃の土師皿や陶磁器、瓦等が出土した。なお、出土遺物には古代の須恵器や布目瓦も混在する。SD-02からは13世紀頃の瓦器・土師器が出土した。中世の落ち込みからは、12世紀頃の瓦器・土師器が出土した。

まとめ 本調査を含む3カ年にわたる調査で、現代まで維持される水路の変遷が明らかとなつた。この水路は鍵池（元禄十二年普請）・唐古池（元禄十六年普請）への導水路であり、池築造に伴って築造された可能性が高い。

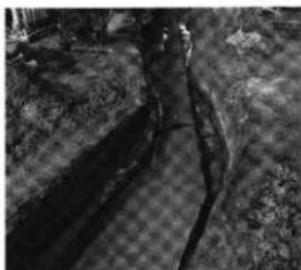
中世の落ち込みは、古代の河川の埋没過程で形成されたものとみられる。また、瓦類の出土から、中世寺院が付近に存在することは間違いない。今後その位置を解明していく必要がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. 調査地北半全景 (北から)

(15) 千代遺跡 第4次調査

所在地 田原本町大字千代小字南垣内1191-2
調査原因 個人住宅の建築
調査期間 2002.10.3

調査面積 2 m²
担当者 豆谷和之
遺物量 1箱

位置・環境 千代遺跡は、標高52m前後の沖積地に立地する。これまでに行われた3度の発掘調査のうち第1次・第2次は、遺跡地図の改定に伴い、現在では「日光寺推定地」として分離されている。

今回の調査地は、中世環濠集落の痕跡を残すといわれる八条集落の東南部にある。東隣接地では、第3次調査が行われ、弥生時代から近世に及ぶ遺構が検出された。このうち、中世末の短期間で機能を停止する南北大溝1条は、断面V字形で防御的色彩をもつものと考えられている。

検出遺構

中世末：土坑2基
ほとんど肩を接するように、2基の土坑を検出した。ただし、調査区が狭くその全容は不明であるが、井戸の可能性が高い。

出土遺物

土坑2基からは、中世末の縁口の口縁部をもつ羽釜と土師器小皿が出土している。

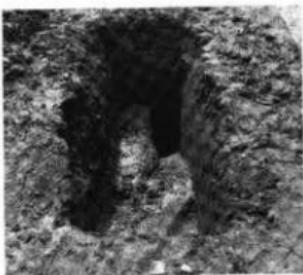
まとめ

今回の調査は、面積が2 m²と極めて小さいものであるが、中世末の井戸と推定される土坑を2基検出した。東隣接地で行われた第3次調査の成果も併せ考えるならば、本調査地周辺部が中世後半頃には屋敷地となっていたことが推測できる。第3次調査の南北大溝と同様に、今回の土坑2基も中世末には機能を停止していたようである。

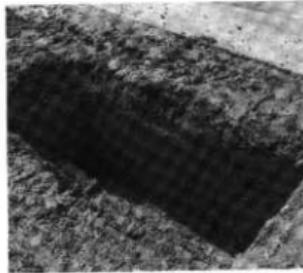
今回の調査地は、面積的に極めて小さいものであったが、中世の環濠集落と現在の八条環濠集落との関係を考えて行くうえで、重要な資料を提供した。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 西壁上層堆積状況 (北東から)

(16) 多遺跡 第21次調査

所 在 地 田原本町大字多小字イノモト608西側水路
調査原因 農業用水路の建設
調査期間 2003.2.14~2.21

調査面積 87m²
担当者 清水琢哉
遺物量 2箱

位置・環境 多遺跡は、標高52m前後の沖積地に位置する。遺跡中央を飛鳥川が北流する。これまでの調査では、弥生時代の環濠集落、古墳時代の集落、中世の水田などを検出していいる。

今回の調査地は、遺跡南端に位置する。東側50mで行われた第11次調査では、弥生時代前期の方形周溝墓1基を検出しており、集落範囲から外れた地点でも何らかの遺構が分布する可能性が考えられた。また、北側の第10次調査では、中世の水田の拡がりを確認しており、本調査地にも同様の遺構の分布が及ぶ可能性が考えられた。

調査地の現状は水路で、深さ1.5mまで近代以降の堆積土が及んだ。このため、重機で近代以降の堆積層を除去して調査を行った。

検出遺構 中世：河川1条、溝1条
近世：井戸2基、溝1条
調査地は、鎌倉時代までは河川だったとみられる。河川埋没後に洪水による埋没が考えられる南北方向の溝1条が掘削される。
近世の溝は、調査地北端で検出した。南南西~北北東方向で、粗砂埋没である。この遺構を切る形で近世末の井戸2基を検出した。井戸は2基一連で、四隅の角杭のうち2本を共有する。

出土遺物 近世末の溝や井戸からは、瓦・陶磁器などが出土した。中世の溝からは中世末の土師器・陶器が少量出土した。

まとめ 調査の結果、調査区全体が中世まで河川であったことが判明した。従って、弥生時代の集落遺構は本調査地まで及んでいないと推定される。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. SD-51土層堆積状況 (北西から)

(17) 中ツ道第1次調査

所在地 田原本町大字蔵堂小字鳥居前555-559-1
調査原因 個人住宅の新築
調査期間 2002.5.27~5.29

調査面積 14m²
担当者 豆谷和之・奥谷知日朗
遺物量 1箱

位置・環境 今回の調査は、式内社である「村屋坐弥富都比売神社」の南に隣接した個人住宅の建替えに伴うものである。本地のすぐ東脇を通る道は橋街道と呼ばれ、古代南北幹線道路である中ツ道の名残と考えられている。今回の調査地は、この中ツ道推定地に該当した。

調査区は建物基礎部分を避け、建物東半部分に東西2m×南北3mの第1トレンチ、西半部分に東西2m×南北4mの第2トレンチを設定した。

検出遺構 中世：素掘小溝5条

近世：素掘小溝、落ち込み1

近代：礎石1基

本調査地が屋敷地として利用されるのは、江戸時代と考えられる。当初の屋敷地は、調査地の西半となる第2トレンチ付近までと考えられる。調査地の東半となる第1トレンチ付近は、中世段階には落ち込んでいたと考えられ、近代の屋敷地はこれを造成して広げられている。近世遺構面から約30cm下位において、中世遺構面がある。この面において南北方向に軸をもつ素掘小溝5条を検出した。

出土遺物 中世遺構面において検出した素掘小溝は、わずかな土師器小片を含む。近代遺構面を形成する造成土には、ガラス片を含む。

まとめ 調査前は、周囲の地形の乱れから初瀬川の氾濫源と考え、近世以前の安定した遺構面の存在を疑問視していた。しかし、今回の調査によって近世以前の遺構面を確認し、南北に軸をもつ素掘小溝を確認したことは、ひとつの成果である。それは、間接的ではあるが、付近に素掘小溝の地割りを規定した中ツ道が通っていたことを想定させるからである。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 第1トレンチ全景 (南から)



3. 第2トレンチ全景 (東から)

(18) 寺内町遺跡 第6次調査

所在地 田原本町小字本町616

調査面積 16m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豊谷和之

調査期間 2002.10.15~10.18

遺物量 約12箱

位置・環境 田原本寺内町遺跡は、標高49m前後の沖積地に立地する。近世初頭、「賤ヶ岳の七本槍」の一人平野長泰は、田原本を拝領するが、居住する意志ではなく、教行寺を誘致し寺内町を経営させた。しかし、二代目長勝が田原本領に入部したことによって、平野氏と教行寺の関係が悪化し、教行寺は1647年に箸尾へと移転する。現在の淨照寺は、この教行寺の跡地に誘致されたものである。

今回の調査地は、この淨照寺の門前、本町の一画にある。最初の寺内町を支配した教行寺に定められた、方三町の範囲にもあたる。

検出遺構 第1トレンチ

中世：落ち込み1

近世：溝1条、土坑2基

近代：土坑2基、溝1条、暗渠（土管埋設）1条、土坑（瓦質鉢埋設）1基
第2トレンチ

中世：落ち込み1

近世：土坑1基

近代：井戸1基、土坑2基

近世遺構面は、中世に溯源と考えられる溝状の落ち込みを被熱した瓦を含んだ暗灰色粘土の整地土で埋め立てたものである。

出土遺物 第1トレンチ

青磁、中国製染付鉢、唐津系片口鉢

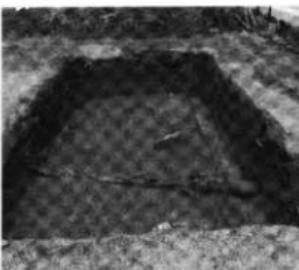
第2トレンチ

土師質焼炉、焰烙

まとめ 調査範囲は狭かったが、近世遺構面を形成した整地土を確認することができた。中世段階の溝状となる落ち込みを埋め立てており、教行寺による寺内町形成に伴う整地土である可能性が高い。



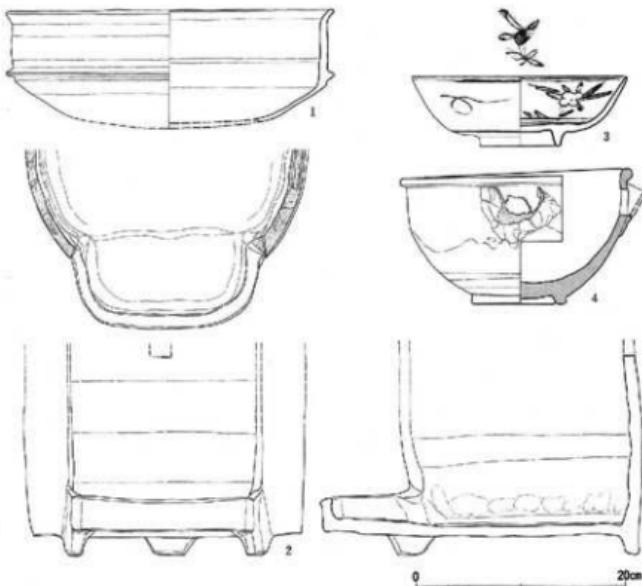
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第1トレンチ全景（南から）



3. 第2トレンチ全景（東から）



浄照寺門前の調査

田原本寺内町遺跡は、浄照寺を中心とする東西350m、南北550mの範囲として周知されている。寺内町の形成は、1602年に教行寺が平野氏に誘致されて以後のことである。1647年の教行寺移転後には、平野氏の陣屋町として発展する。また、寺内町の前身となる中世集落の存在も文献、建築物、発掘調査等から判明している。

今回の調査地は浄照寺の門前であり、寺内町遺跡の中心部にあたる。調査の結果、中世・近世・近代の三つの遺構検出面を確認することができた。近世の遺構検出面は、中世の溝状になる落ち込みを埋め立てたものであり、教行寺の寺内町形成に伴うものと推測される。

近世前半の遺構であるSK-1104は浅い皿状の土坑で、第1トレチの北西端で検出した。瓦および陶磁器が廃棄されていた。中国製染付鉢(1)は、漳州窯系とされる製品に類似する。日本国内では、類似品の多くが16世紀末から17世紀初めの遺物に伴うという。陶器の片口鉢(2)は唐津系で、17世紀前半の特徴をもつ。

近世後半の遺構であるSK-2104は、方形の土坑で、第2トレチの南端で検出した。土師質の焼炉(2)および焰硝(1)が出土した。18世紀後半と考えられる。

Column 7

寺内町遺跡
第6次

(19) 西代遺跡 第1次調査

所在地 山原本町大字西代小字取田79-1

調査原因 防火水槽の設置

調査期間 2002.10.8~10.9

調査面積 21m²

担当者 奥谷知日朗

遺物量 1箱

位置・環境 西代遺跡は、標高約46m前後の沖積地に立地する室町時代の遺物散布地である。現西代集落の北方、東西約250m、南北約150mが遺跡の範囲である。当遺跡の発掘調査ではなく、その実態は不明である。本調査地は、遺跡の南西端部にあたることから、遺構密度は希薄と考えられた。

検出遺構 近世：素掘小溝6条

いざれも東西方向に軸をもつ素掘小溝である。遺物はほとんど伴わず、その掘削時期を特定するまでには至らなかったが、層序および遺構埋土から、近世の耕作に伴うものと考えられる。

出土遺物 素掘小溝から、土師器、須恵器、瓦器がごく少數出土した。

まとめ 今回の調査では、近世とみられる素掘小溝を数條検出したのみであり、西代遺跡に直接関連する遺構は認められなかった。

また、本調査地の地山層は、ゆるやかに西に向かって傾斜していることから、本調査地よりも西側に谷地形の拡がりが予想される。当遺跡においては今回が初の調査であり、また調査区が狭小であったため予測の域を越えないが、西代遺跡は、この谷地形よりも東側に形成されており、本調査地は当遺跡の範囲外と考えられる。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 遺構検出状況 (東から)



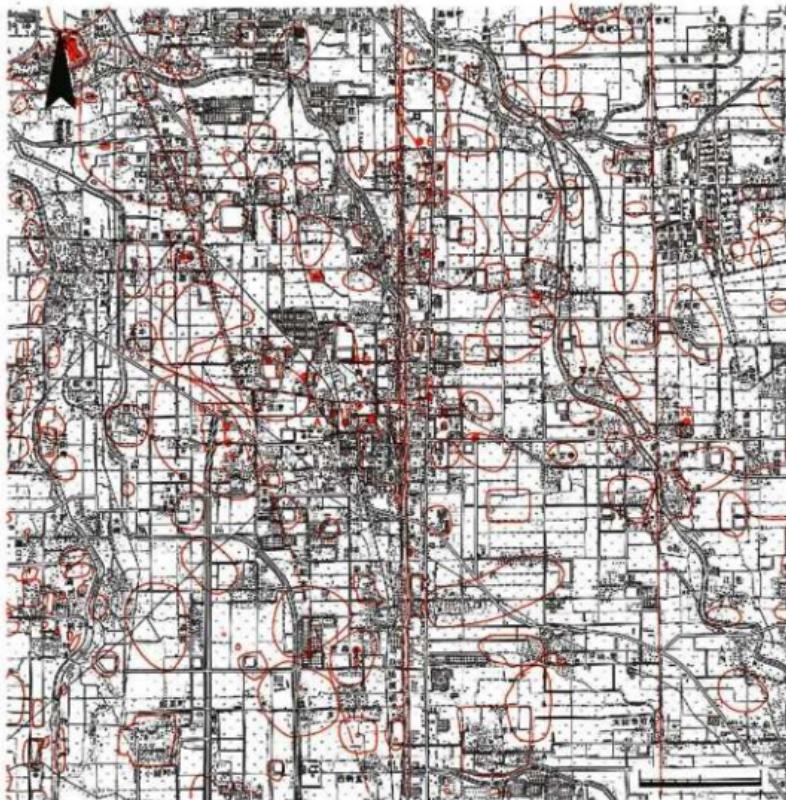
3. 南壁土層堆積状況 (北から)

III. 試掘調査・工事立会の概要

2002年度（平成14年度）の試掘調査は2件（第3表）、工事立会は17件（第4表）である。いずれも際立った成果はみられない。

2件の試掘調査は羽子田遺跡内で実施したもので、その概略を後述するが、八尾池の東側の試掘調査では、須恵器の精巧な水鳥の装飾が出土しており、注目される。

工事立会では、遺構面まで達しないものや搅乱による遺構破壊を受けていたもの、顯著な遺構が存在しないものなどが大半であった。ただし、唐古・鍵遺跡の下水道污水橋設置に伴うもの（R-200207）では、弥生時代中期頃の土坑らしきものを確認している。



出原本町の道路と試掘調査及び工事立会地点

(1) 羽子田遺跡 試掘調査 1 (S-200201)

所在地 田原本町字西羽子田400-1

調査面積 9 m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 2002.9.18

遺物量 1箱

位置・環境 羽子田遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。発掘調査はこれまでに25次に及び、弥生時代中期から古墳時代前期の集落、弥生時代中期の方形周溝墓と古墳時代前期から後期の古墳群が検出されている。

今回の調査地は、遺跡の南西端にあたる。周辺では、今回の調査地の南側で平成9年に第13次調査を本町教育委員会が行っている。第13次調査で検出した遺構は、古墳時代の溝1条と中世素掘小溝であった。中世素掘小溝以外の遺構密度は希薄で、遺跡縁辺部の生産的な状況が窺えた。このため、隣接した本地において試掘調査を行い、遺構および遺物の有無を確認することとした。

検出遺構 中世以前：土坑2基、柱穴状遺構5基、溝状遺構1条

中世：素掘小溝1条

第13次調査地と同様に、中世遺物包含層である灰褐色粘土の抜がりを確認した。中世素掘小溝は、この灰褐色粘土の下の地山である黄灰色粘質土の上面で、同じ灰褐色粘土を埋土として検出された。黄灰色粘質土の上面では、その他、暗褐色粘質土を埋土とする土坑や柱穴状の遺構を検出することができた。これらの遺構は、中世素掘小溝に切られている。

出土遺物 暗褐色粘質土を埋土とする中世以前の遺構からは、土師器小片が出土した。

まとめ 今回の調査によって、中世以前の遺構が検出されたことにより、羽子田遺跡の範囲が本地周辺まで確実に拡がることが明らかとなった。しかし、包含される遺物は少なく、遺跡縁辺部の可能性が高い。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 遺構検出状況 (北から)



3. 遺構完掘状況 (北から)

(2) 羽子田遺跡 試掘調査2(S-200202)

所在地 田原本町大字八尾小字今田557番地の3の一部
調査原因 分譲住宅開発
調査期間 2002.9.19~9.20

調査面積 34.5m²
担当者 豆谷和之
遺物量 1箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡の東端部にあたる。周辺地の八尾池では、平成13年に第22次、平成14年に第25次調査が東内堤で行われている。これらの調査では、近世よりも遡る遺構は検出されていない。弥生時代中期の方形周溝墓が検出された西内堤の第20次調査とは様相がかなり異なっている。遺跡の末端的様相とも考えられた。しかし、第22次調査では、近世の遺構に古墳時代の土器が混入しており、池築造時に浅い遺構が削平された可能性も残していた。このため、遺跡範囲の東端である今回の調査地において試掘調査を行い、遺構および遺物の有無を確認することとした。

試掘は、下水管埋設設計画部分の南北総延長67mに、幅1.5m、長さ10mのトレンチを、両端と中心の3カ所に設定した。

検出遺構

近世：粘土探柵坑1基

出土遺物

出土遺物の大半が摩耗した土器や瓦器塊の小片であるが、特筆すべき遺物が2点ある。

縁釉陶器片と水鳥頭部を模した須恵器片である。この水鳥頭部は手づくねで、嘴をつまみ出し、目・耳・鼻・羽毛を刺突で表現する極めて精巧な作品である。

まとめ

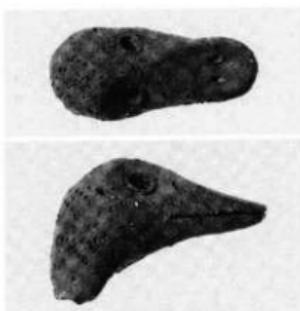
今回の調査において検出した遺構は、第3トレンチの粘土探柵坑1基のみである。遺物包含層としては地山の上に堆積する灰色粘土層がこれにあたるが、遺物の包含量は希薄であった。おそらく、八尾池東側は羽子田遺跡の東縁辺となるのであろう。ただし、水鳥頭部を模した須恵器片や縁釉陶器片は、付近に官衙の存在を暗示させる遺物である。周辺での開発には、慎重に対応していく必要がある。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 粘土探柵坑完掘状況 (南から)



3. 須恵器の水鳥頭部装飾

第3表 2002年度 試掘調査一覧表

番号	道跡名	調査地	原因者	工事の目的	進度書号 (田教文発)	進 進 日	調査日	内 容
A	羽子田遺跡 (S-200201)	田原本町400-1	中島昭司	個人住宅の建築	31	02. 8. 9	02. 9. 18	9m ² の試掘坑を設定。中世以前の土坑2基、柱穴状遺構5基、溝状遺構1条などを検出。遺物は少ない。
B	羽子田遺跡 (S-200202)	田原本町八尾 557-3の一部	日進不動産株式会社	分譲住宅の建築	27	02. 7. 23	02. 9. 19 ～ 9. 20	幅1.5m、深さ10mの試掘トレンチを3ヵ所設定。粘土探査坑1基のみ検出。遺物は少ないが、鉄物類器片と水鳥頭部を模した須恵器片が出土した。

第4表 2002年度 工事立会一覧表

番号	道跡名	調査地	原因者	工事の目的	進度書号 (田教文発)	進 進 日	調査日	内 容
1	遺物散布地 (11-C-060) (R-200201)	田原本阪手459-8	藤本匡秀	個人住宅の建築	47	02. 3. 8	02. 4. 1	基礎掘削時に立会。掘削は深さ0.2mで水田床上内にとどまる。
2	阪手北遺跡 (R-200202)	田原本町阪手 285-1	森川俊司	個人住宅の建築	1	02. 4. 16	02. 5. 18	F水道掘削時に立会。深さ0.4m前後の掘削で、擾乱層内であった。
3	寺内町遺跡 (R-200203)	田原本町341-1 342	寺田君子	長屋建住宅の建築	48	02. 3. 27	02. 5. 24	2.5m×2mの試掘坑を設定。深さ1mまで掘削するも遺構・遺物なし。
4	法賀寺遺跡 (R-200204)	田原本町法賀寺 1652	前川増男	個人住宅の建築	15	01. 8. 21	02. 6. 14	1m×0.6mの試掘坑を設定。遺物を遺構なし。
5	宮森遺跡 (R-200205)	田原本町宮森 100-52	松谷幸裕 松谷百合子	個人住宅の建築	5	02. 5. 21	02. 6. 15	現地表面から深さ0.8m掘削するも客室内であった。
6	清水風遺跡 (R-200206)	田原本町唐古 363-1	森良トヨベック ト神	飯金工場の建築	45	02. 2. 26	02. 7. 3	現地表面から深さ0.1mの掘削であり、客室内にとどまる。
7	唐古・鏡遺跡 (R-200207)	田原本町鏡306	松井宏敏	下水道汚水井の設置	11	02. 6. 7	02. 7. 11	工事掘削時に立会。因道橋壁工事や看板支柱埋設時などの過去の工事による擾乱部分が遺存を占める。弥生時代中期頃の土坑1、第4生時代前の遺構あり。
8	秦庄遺跡 (R-200208)	田原本町宮森 257-5	細山商事㈱	倉庫建築	21	02. 7. 16	02. 8. 22	施設拡上げ工事時に立会。掘削が浅く、客七内にとどまる。
9	保津・ 宮古遺跡 (R-200209)	田原本町宮古 256-2他常磐道路	田原本町長	道路拡幅工事	33	02. 9. 6	02. 10. 9	道路北側掘削工事の掘削部分で立会。遺物は少いものの遺構の分量は認められる。近世の大きな擾乱があり、宮古池築造に関わる可能性がある。
10	十六面・ 栗王寺遺跡 (R-200210)	田原本町保津 273-1	大曾志嗣	配達センター建築	46	02. 3. 7	02. 10. 11	基礎掘削に伴い、立会。客土内にとどまる
11	羽子田遺跡 (R-200211)	田原本町新町 135-1他東側道路	田原本町長	道路拡幅工事	37	02. 9. 6	02. 11. 13	道路西側の水路改修工事部分で立会。顯著な遺構はみられない。
12	唐古寺跡 推定地 (R-200212)	田原本町唐古 526-1	栗原嘉津治	店舗新築	15	02. 6. 4	02. 11. 19	遺跡北端での開発。基礎掘削が浅く、遺構・遺物の検出なし。

番号	遺跡名	調査地	原団者	工事の目的	遺跡番号 (田数文発)	進度日	調査日	内 容
13	十六面・ 薬王寺遺跡 (R-200213)	田原本町保津 273-1	大倉忠嗣	防火水槽の設置	46	02. 3. 7	02. 11. 26	防火水槽設置部分の掘削時に立会。居館周辺遺構はなく、居館周辺とみられる
14	十六面・ 薬王寺遺跡 (R-200214)	田原本町保津254 南側道路	大倉忠嗣	下水道立坑の設置	46	02. 3. 7	02. 12. 13	開発堆南側町造上の下水道立坑掘削時に立会。新開で溝状遺構を確認。遺物は出土していない。
15	阪手北遺跡 (R-200215)	田原本町阪手 189-1	寺田君子	店舗の建築	59	02. 11. 15	03. 1. 7	現地表から5.9mの掘削。掘削は旧地表面でとどまり遺構・遺物は有無不明。
16	金沢遺跡 (R-200216)	田原本町金沢44-5	今中敏幸	個人住宅の建築	53	02. 10. 23	03. 1. 8	建物予定地中央に試掘坑を設定。堆表より1.3mで実機小便を検出したが、遺物は土師器類のみ。
17	羽子田遺跡 (R-200217)	田原本町299-3	橋和	分譲住宅の建築	63	02. 12. 5	03. 3. 24	第13次調査地での設計変更による再掘出。試掘坑2カ所を設定するも中世素掘小便以外に顯著な遺構なし。

田原本町埋蔵文化財調査年報12
2002年度

平成15年3月30日

編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 株式会社天理時報社

